

令和6年度 学力向上プラン

学校名 月島第二小学校

心の豊かな子ども・よく考える子ども・たくましい子ども

教育目標を達成するために学校として重点的に育成を目指す資質・能力（確かな学力向上にかかわる内容）

- ・基礎学力を確実に身に付けさせるとともに、一人一人の習熟度に応じて学力を伸ばす指導を行う。
- ・児童自ら課題を発見し、主体的に問題を解決する力を身に付けさせる。

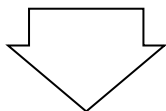
令和6年度「学習力サポートテスト」や令和6年度学力向上プランの検証結果、学校評価の結果等によって明らかになった課題及び要因

	児童・生徒の学力の課題	主な要因
国 語	4年生の学習力サポートテストでは、全体的に区の平均正答率よりも上回り、6年生においては、区の平均正答率を大きく上回っていた。全国学力・学習状況調査では、全ての項目で正答率の割合が平均より上回っていたが、「話すこと・聞くこと」の項目は65％と他の項目より正答率が低かった。 5年生は、全体的に区の平均正答率を下回る結果となった。特に「説明文の読み取り」問題では、区の平均正答率を2％下回ったのに対し、「物語の内容を読み取る」問題では、区の平均正答率を10％下回っており、特に物語の読み取りが苦手なことが明らかになった。	・「話すこと・聞くこと」については、授業だけでなく、日常生活の中で目的を意識して話の中心や構成を考えて話させたり、要点をメモして聞き取らせたりする機会が少ないためだと考えられる。 ・説明文や物語の読解力については、基礎となる漢字や言語事項などの反復学習が不十分であることが推測される。 ・領域別の正答率を見ると、「情報の扱いに関する事項」の領域が区の平均正答率を26.6％下回っていることから、目的や意図に応じて情報や材料を分類したり、関係づけたりして整理する機会の設定が十分でないことや、根拠を明らかにする言語活動が足りていないことが要因ではないかと考えられる。
算数	4年生の学習力サポートテストでは、区の平均正答率より1ポイント下回った。領域でみると「図形」が区の平均正答率に比べ5.2ポイントと大きく下回った。 5年生の学習力サポートテストでは、区の平均正答率より2.2ポイント下回った。領域でみると「図形」が4.1ポイント、「データの活用」が3.1ポイント下回った。また観点別正答率では、「思考・判断・表現」が区の平均正答率よりも5.2ポイント	・4、5年生は、全ての領域において区の平均正答率を下回っていることから、どの単元においても、学習の基礎・基本の定着が図られていないことが主な要因として考えられる。 ・「図形」については、習熟のための練習問題が足りていな

	下回った。 6年生の学習力サポートテストでは、区の平均正答率より3.9ポイント上回った。全ての領域において、区の平均正答率を上回っている。全国学力・学習状況調査においても、すべての問題において全国の正答率を大きく上回っていた。	いことや、算数科だけでなく、教科等横断的な活動を通して、図形の観察や構成などを理解する活動が多くないことだと考えられる。 ・6年生は、難解単元の一つである「割合」の領域において、全国の目標値や区の平均正答率を12ポイント以上、大きく上回っている。昨年度の校内研究で、重点的に検討し、指導した成果が表れたと考えられる。
社 会	4、6年生の学習力サポートテストでは、全体的に区の平均正答率よりも上回っていた。しかし、地図の読み取りと、他の資料を合わせて活用する問題に対して苦手とする傾向が見られた。 5年生での同テストでは、区平均正答率よりも1～3ポイントほど下回る結果となった。特に、「特色ある地域の様子」では、目標値より上回っているが、区平均正答率より3.6ポイント下回った。	・どの学年も、基礎よりも活用の正答率が低い傾向が見られる。学習活動の中で、複数の資料を読み取る活動が少ないことが要因として考えられる。 ・各単元において既習事項の定着を図るための手だてが少ないことや、地図の活用頻度や複数の資料を同時に読み取る学習が少ないこと、目で確認するデジタル教材やICT機器の活用頻度が高く、手作業による記憶に残る活動が少ないことが考えられる。
理 科	4年生は、区の平均正答率よりも4.7ポイント上回った結果となった。しかし、問題の内容において「光のせいしつ」と「じしゃくのせいしつ」においては、区の平均正答率を「光のせいしつ」2.2ポイント、「じしゃくのせいしつ」0.6ポイント下回る結果となった。 5年生は、区の平均正答率より8.4ポイント下回った。特に「活用」が13.2ポイント下回っている。また観点別正答率では、「思考・判断・表現」が区の平均正答率よりも9.6ポイント下回った。 6年生の学習力サポートテストでは、全体的に区の平均をどれも上回った。しかし、目標値と比べて、校内平均正答率は「人のたんじょう」において11.8ポイント低い結果になった。	・区の平均正答率を下回っている学年は、学習の基礎・基本の定着が足りないことが主な要因として考えられる。 ・本校は、教科担任制（交換授業）を行っているため、担当教員の授業力・指導力も課題となっているが、国語や算数よりも理科は家庭学習など含め、練習問題に取り組む機会が少ないことが要因だと思われる。光や磁石の資質などについては、実験や体験などを通して、経験知を上げていく機会が十分でないからだと思われる。
英 語	6年生の学習力サポートテストでは、区の平均正答率より1.1ポイント下回った。また、「アルファベットの書き」問題において、音声聞いて活字体の小文字を正しく書く問題の正答率が、全国正答率	・主な要因としては、聞き取ったアルファベットの音を、活字体の大文字と小文字を区別した上で正確に四線上に書く力

	よりも4.3ポイント下回った。	が不足していることが考えられる。
体育	体力テストの結果を全国平均のTスコアと比較すると、全学年共通して長座体前屈のスコアが下回っていたことが分かった。特に2年生、3年生、4年生女子、5年生男子、6年生男子は、5ポイント以上下回っている。 また、50m走も6年女子を除き全国平均のTスコアを下回っている。特に低学年男子が10ポイント以上下回っている。学校全体で柔軟性、低学年男子では、素早さや力強さに明確な課題が見られた。	・主な要因として、生活環境の中で筋肉を使う場が少ないことと、体力向上・強化に特化した学習がまだ十分でないことだと考えられる。 ・コロナ禍を機に学校外の活動が減り、運動不足の児童が増加傾向になったことも要因の一つとして考えられる。
学力向上に向けた視点		年度末までの目標及び指標
① 各教科	国語	日常生活の中で目的を意識して「話す・聞く」活動を毎日1回以上取り入れ、国語科を中心に言語活動の充実を図る。 また、読解力の基礎となる漢字や言語事項などの反復学習を行い、漢字・言語事項の定着を図る。年度末までに各学年、前学年までの既習漢字の定着率90%を目指す。
	算数	基礎・基本の確実な定着と令和7年度の学習力サポートテストにおいて、全学年で区平均を上回るようにするために、朝・昼学習、補習（放課後さんすう塾）の時間を確保し、ドリル型の計算問題に取り組ませる。年度末までに各学年、既習の四則計算の定着率90%を目指す。
	社会	社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考えたり、課題を把握して解決に向けてまとめたりする力を育成する。その基礎となる知識・技能を身に付けるために、年度末までに単元毎にミニテストを行い、全単元で定着率90%を目指す。 また、令和7年度の学習力サポートテストにおいて、全学年で区平均を上回るようにする。
	理科	自然の事物・現象に対する気付き、問題の設定、予想や仮説の設定、検証計画の立案、観察・実験の実施、結果の処理、考察・結論という問題解決の各過程における資質・能力を明確にし、育成する。そのために単元毎の振り返りの時間の確保と年度末までに単元毎にミニテストを行い、全単元で定着率90%を目指す。 また、令和7年度の学習力サポートテストで、全学年、区の平均を上回るようにする。
	英語	言語や文化について体験的に理解を深め、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませ、聞くこと、話すこと（やり取り、発表）の力を育成する。既習事項を活用し、特に聞く力と書く力を定着させる。簡単な英作文を90%の児童が書けることを目指す。 また、令和7年度の学習力サポートテストで、区平均を上回るようにする。
	体育	体育科の学習だけでなく、日常生活の中で「運動」に親しむ時間を確保していくとともに、都の体力調査で思わしい結果が出な

②		かった柔軟性、素早さや力強さの向上を図る。マイスクールスポーツの「なわとび活動」で持久力を保持しながら、準備運動などで柔軟性や素早さ、力強さにつながる活動を取り入れ、柔軟性や素早さ、力強さを向上させる。 また、令和7年度の体力テストで、都平均を上回るようにする。
③ 授業改善		児童に「主体性をもたせ」、「児童の思考や対話的な学びを活性化させ」、「児童が自らの学びを実感し次に生かす」授業を目指す。そのために、授業改善の視点とし、児童が自らめあてをもつための課題設定や導入の工夫、単元において育てたい資質・能力の明確化、育てたい資質・能力を引き出す教師の問い返しを高める「問い」と「めあて」と「まとめ」の整合性を図る授業づくりを行う。 ・児童の思考力・判断力・表現力をバランスよく育成していく。 ・児童の「学校評価アンケート」で「授業の内容がよく分かる・分かる」と回答する児童95%以上を目指す。 ・保護者の「学校評価アンケート」で「分かりやすく楽しい授業をしている」ことに概ね満足と回答する保護者90%以上を目指す。
④ 家庭との連携		・年2回設定されている個人面談の時間を有効活用し、児童の課題を明確に伝え、家庭との連携を深める。児童の学力向上に向けた教育活動への理解と協力を図り、目的と目標の共有化のもと、高い学習成果を目指す。 ・保護者の「学校評価アンケート」で「通知表等を通して児童の学力を適切に評価している」ことに「概ね満足」と回答する保護者90%以上を目指す。
⑤ 体力向上		都の体力調査の結果を生かし、強化すべき一人一人の体力、運動能力・技術の向上を図るとともに、生涯を通じて児童が運動の楽しさを味わい、スポーツに親しめるよう、個々の児童の体力の向上を図る。 ・全項目において都の平均数値を上回る結果を目指す。 ・学校評価アンケートで「自分の体力づくりに取り組んでいる」ことに「できた」と回答する児童90%以上を目指す。



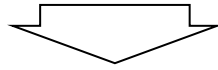
【目標達成のための具体的な取組内容】

① 各教科	
国語	日常生活の中で目的を意識して「話す・聞く」活動を毎日1回以上取り入れる。読解力の基礎となる漢字や言語事項などの反復学習を全学年において毎日の家庭学習で漢字の練習を実施させる。復習プリントやミライシード等を活用し、個別の学習状況や習熟度に合わせて、反復練習を繰り返し、定着させる。 また、読解力を高めるために、読解問題を解く練習を積み、解答する際に本文の根拠を明らかに解答することを徹底した指導を行っていく。

	授業では根拠となるところに線を引かせ、根拠を明確にして解答する習慣を身に付けさせる。
算数	基礎・基本の確実な定着のために、全学年で計画的に朝・昼学習、補習（放課後さんすう塾）の時間を確保し、ドリル型の計算問題に取り組ませる。その際、ドリルパークや復習プリント、東京ベーシックドリル等を活用し、反復させることで定着させていく。また、家庭学習でもドリルパークを積極的に活用する。 全学年において文章課題に取り組む際に、何を求める問題なのか、今分かっていることは何か、アンダーラインを引かせることで、誤答を減らしていく。
社会	全学年（３～６年）において都道府県や地形、世界の国土等の掲示物を教室に貼り、児童が興味・関心をもてるようにする。 また、既習事項を確認できるよう単元毎のミニテストの実施や、朝・昼学習や家庭学習で、プリントやドリルパークを活用することで、社会的事象を自分の生活と関連付けて考える力を伸ばしていく。
理科	問題解決学習の各過程を大切にし、資質・能力の明確化を図る。全学年（３～６年）において実験・観察活動、デジタル教材や ICT 機器の活用を通して、考察する時間を確保するとともに、科学的に追求して意見を交流することで、事象の理解を十分深められるようにする。 また、年間を通して、家庭学習にドリルパークの理科の学習を積極的に活用し、授業で学習して理解したことを定着させる。
英語	５、６年生において学習活動の中で英語の音声を聞く時間を確保し、自分の思いや考えを四線上に書く時間を確保し、正しく書く力を定着させる。また、ALT と協力して個別指導をきめ細かく行うことで、正しい文字の書き方を児童が身に付けられるようにする。
体育	全学年において、体育科学習の準備運動になわとび活動を取り入れ、持久力の保持に努める。また、柔軟性や素早さ、力強さを高める活動を積極的に体育の授業や、たてわり班活動、休み時間の学級遊びなどで取り入れ、体力の向上を図っていく。日常的に運動に取り組む習慣を身に付けさせ、運動に親しむ児童の育成に努め、全校児童の５割が二重跳びを５０回以上跳べるように、指導していく。
②授業改善	
取組Ⅰ	算数科を中心とした校内研究「児童一人一人が分かった！できた！！」「楽しい！と実感できる授業づくり」を通して、互いの授業を見合ったり、改善案を話し合ったりして、授業力の向上を目指す。また、毎日の管理職の授業観察のフィードバックを通して、週毎のめあてを明確にして、指導を行う。データに基づく学力の実態や状況を、的確に分析する機会を本校の課題解決委員会と各教科部会中心に学期毎に設定し、学力向上・課題解決のための的確な手立て（取組）を全学年で共有する。その後、全学年で主要４教科及び英語、体育・保健体育について単元毎に取組の成果をテストなどのデータで確認し、取組や指導の改善を図る。学力向上委員会で P D C A 一覧を作成し、１年間の取組を見える化し、確実な改善を図る。

取組Ⅱ	若手教員の授業力向上を目指し、月に1回OJT研修を実施する。若手教員が行った授業について、参観した教員中心に協議会をもち、助言・指導を行うことで、教員相互の授業力の向上を図る。また、法定研修の「校内における研修」の機会を生かし、主幹・主任教諭が若手から希望のあった領域について、ミニ研修を行うことで教員の指導力を高めていく。
家庭との連携	
取組Ⅰ	年2回設定されている個人面談と年3回の時間を有効活用し、児童の課題を明確に伝え・家庭との連携を深め、児童の学力向上に向けた教育活動への理解と協力のもと、より高い学習成果を目指す。
取組Ⅱ	月に一度、学校便りや学年便りで、学校や学年の取組や学習内容、学習状況を伝えることに加え、必要に応じてGoogle classroomを配信したり、tutoruを活用したりして、家庭と連携を図っていく。

④体力向上	
取組Ⅰ	低学年において、固定遊具を使った運動や体全体を使った投動作、持久力を高めるマイスクールスポーツ・なわとびの活動、体を大きく動かす遊びを通して、握力、持久力、基礎的体力の向上を目指す。また、柔軟性を高める準備体操の継続的な設定や、柔軟性を高めるマット運動や「ごっこあそび」、素早さを高める走る運動や「しっぽ取り」などの遊びを意図的に授業や休み時間に取り入れる。低学年から竹馬や一輪車を使って遊ぶことを通して、バランス力の向上を目指す。
取組Ⅱ	都の体力調査の結果を基に強化すべき一人一人の体力、運動能力・技術を児童と教員で共有・明確化し、関係する単元の授業で粘り強く取り組めるよう、「めあてカード」を活用し、どのような力がどのくらい伸びたかを記録し、体力向上を実感できるようにする。 マイスクールスポーツなわとびを継続・特化し、定期的になわとび検定を行い、行事「なわとびコンクール」を行い、練習の成果を示す場を作る。 また、なわとび講習会を受けることで、短縄の技術や体力、運動能力の向上を目指すと同時になわとび活動に更なる興味をもたせる。全学級で長縄に取り組む。長縄週間を毎学期設定し、学期ごとに学級で長縄の記録を取る。また、記録を掲示することで、意欲をもたせる。



【取組結果の検証】

学力向上に向けた視点		取組の成果	取組の課題及び解決策
① 学力基盤	国語	読解力の基礎となる漢字や言語事項などの反復学習を全学年において行っていたことで、多くの児童が定着できた。 読解力を高めるために、解答する際に本文の根拠を明らかに解答する指導を丁寧に行ったことで、読解問題に抵抗なく取り組めるようになった。	日常生活の中で「話す・聞く」活動を毎日１回以上取り入れることを目標としてきたが、なかなか取り組めず来年度の課題となった。来年度は、各学級で意識した取り組みを確実にやっていく。 更に読解力を高めるために、授業では根拠となるところに線を引かせ、根拠を明確にして解答する習慣を身に付けさせていく。
	算数	基礎・基本の確実な定着のために、全学年で計画的に朝・昼学習、補習（放課後さんすう塾）の時間を確保し、ドリル型の計算問題に取り組んだことで、四則計算の定着を図ることができた。	全学年において文章課題に取り組む際に、何を求める問題なのか、今分かっていることは何か、アンダーラインを引かせることで、誤答を減らしていく。 家庭学習において、ドリルパークを活用している学級が少なかったため、来年度は週１回以上の活用を全学級で実施できるように徹底していく。
	社会	既習事項を確認するために、単元毎のミニテストを行うことで定着を図ることができた。また、家庭学習で、積極的にドリルパークを活用することで、社会的事象を自分の生活と関連付けて考える力を伸ばすことができた。	児童が都道府県や地形、世界の国土等に更に興味・関心をもてるようにするために、来年度は全学年（３～６年）において都道府県や地形、世界の国土等の掲示物を教室に貼るようにする。
	理科	全学年（３～６年）において実験・観察活動、デジタル教材やICT機器の活用を通して、考察する時間を確保するとともに、科学的に追求して意見を交流することで、事象の理解を十分深めることができた。 年間を通して、家庭学習にドリルパークの理科の学習を積極的に活用したことで、授業で学習して理解したことを定着させるこ	問題解決学習の各過程を大切にし、資質・能力の明確化を図ると同時に、既習事項を確認するために、引き続き単元毎のミニテストを行うことで定着を図っていく。

		とができた。	
	英語	学習活動の中で英語の音声を聞く時間や、自分の思いや考えを四線上に書く時間を確保してきたことで、正しく書く力を定着させることができた。	専科教諭と ALT が連携した授業を行うことで、更なる聞く・書く力を伸ばしていく。
	体育	体育科学習の準備運動になわとび活動を取り入れた学年は、持久力を保持することができた。 柔軟性や素早さ、力強さを高める活動を積極的に体育科の学習だけでなく、たてわり班活動や、休み時間の学級遊びなどで積極的に取り入れたことで、更なる体力の向上につながった。	体育科学習の準備運動に縄跳びを活用することを全学年実施するようにすることで、学校全体の体力の向上を図っていく。
② 授業改善		算数科を中心とした校内研究「児童一人一人が分かった！できた！！」「楽しい！と実感できる授業づくり」を通して、互いの授業を見合ったり、改善案を話し合ったりしてきたことで、授業力の向上を図ることができた。 若手教員の授業力向上を目指し、OJT研修を実施してきたことで、教員相互の授業力の向上を図ることができた。 法定研修の「校内における研修」の機会を生かし、主幹・主任教諭が若手から希望のあった領域について、ミニ研修を行ってきたことで、教員の指導力を高めることができた。	データに基づく学力の実態や状況を、的確に分析する機会を本校の課題解決委員会と各教科部会を中心に学期毎に設定し、学力向上・課題解決のための的確な手だて（取組）を全学年で共有していくことで、更なる学力の向上を目指し、学校全体の授業改善を図っていく。 全学年で主要4教科及び英語、体育・保健体育について単元毎に取組の成果をテストなどのデータで確認し、取組や指導の改善を図っていく。 学力向上委員会でPDCA一覽を作成し、1年間の取組を視覚化し、確実な改善を図っていく。
③ 家庭との連携		年2回設定されている個人面談を有効活用し、児童の課題を明確に伝えることで、家庭との連携を深めることができた。	児童の学力向上に向けた教育活動への理解と協力のもと、より高い学習成果を目指していく。 月に一度、学校便りや学年便りで、学校や学年の取組や学習内容、学習状況を伝えることに加え、必要に応じて Google classroom を配信したり、tetoru を活用したりして、引き続き家庭と連携を図っていく。
④ 体力向上		どの単元の授業においても、「めあてカード」を活用し、どのような力がどのくらい伸びたか	柔軟性を高める準備運動の継続的な設定や、柔軟性を高めるマット運動や「ごっこあそび」、素

	を記録してきたことで、児童一人一人が体力の向上を実感することができた。 また、なわとび講習会を受けることで、短縄の技術や体力、運動能力の向上を目指すと同時になわとび活動に更なる興味をもつことができた。 長縄週間を毎学期設定し、学期ごとに学級で長縄の記録を取り、長縄大会を設定したことで、意欲をもって取り組むことができた。	早さを高める走る運動や「しっぽ取り」などの遊びを意図的に授業や休み時間に積極的に取り入れていく。低学年から竹馬や一輪車を使って遊ぶことを通して、バランス力の向上を目指していく。
--	---	---